



第191回定期演奏会

2022年7月29日(金) 17:45開場 18:45開演
三井住友海上しらかわホール
コンサートマスター/安永徹 ピアノ/市野あゆみ*
モーツァルト:ピアノ協奏曲第17番*
エルガー:弦楽セレナーデ
モーツァルト:交響曲第40番

*ピアノ協奏曲は当初予定しておりました第24番より変更になりました。

ブラームスにシューベルトと、ドイツ・オーストリア音楽の王道をお楽しみいただいている本日……に続きまして、次回定期(7月29日)は、世界的ヴァイオリニスト・安永徹をコンサートマスターに迎えるのプログラム。……指揮者はおりません。敢えていえば、安永さんがその役割を果たします。

オーケストラ奏者は全員、それぞれの音楽を磨く大切な存在です。しかし、表現をうまくまとめてひとつの音楽にするのは(いかに普段から親密とはいえ)簡単ではありません。そこで、表現の中心となる大黒柱——コンサートマスターの存在がたいへん重要になります。

本日の演奏会でも、素晴らしいコンサートマスターがいてこそ、マエストロ・マストの意図するところがセントラル愛知交響楽団の全員に伝わり、一体となった音楽が表現されているわけですが……遙か昔、それこそモーツァルトやシューベルトの時代くらいまでは、今より編成の小さなオーケストラで指揮者もなしの演奏が普通でした。

◆コンサートマスター、その素晴らしい存在!

コンサートマスターとは、オーケストラ奏者の全員を統率して演奏をまとめ、指揮者の意図するところをオーケストラが具体的に表現するために、その身振りなどいろいろな指示を出すひとです(ごく稀な例外を除いて、第1ヴァイオリン奏者の首席……指揮者のすぐ左・最前列に座る奏者が務めます)。

楽員は全員、コンサートマスターのごく細かな動きまで見ながら、音の出だしや表現の仕方を合わせていきますので(もちろん指揮者も見ています!)、優れたコンサートマスターがいなければ、オーケストラは上手くいきません。

なにか予期せぬ演奏トラブルが起きたときも、どうするかをとっさに判断するのは、コンサートマスターの役割です。ですから、コンサートマスターは、オーケストラの全パートが何を演奏するのか、指揮者と同じくらい楽譜を熟知していなければいけません。

リハーサルの時から、指揮者とオーケストラの意思疎通を図るのもコンサートマスターの大切な仕事です。高い音楽性から瞬発力、人間性などなど(皆から頼られる素晴らしいひと)でないと務まりません。楽器が上手ければいいというものではないので、その役割を熟知したコンサートマスターというのは貴重な存在です。ご興味あるかたは、『ONTOMO MOOK 世界のコンサートマスターは語る』[音楽之友社、2019年]というムック本(書店では雑誌扱い)に、世界の名門オーケストラから51人のコンサートマスターへのインタビューなどが集められていて、自身の役割や豊かな経験について語っているのが面白いので、そちらもお読みいただくとして。

◆安永さんと市野さん —— モーツァルトに聴く、協奏曲の醍醐味

次回定期にお迎えする安永さんは、世界の頂点を極める名門楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団で1983年から2009年まで四半世紀余の長きにわたってコンサートマスターを務めた名手。退任後は日本に拠点を移し、指揮者なしのアンサンブルを率いたり、ピアニスト・市野あゆみさんとの夫妻デュオなど室内楽でも活躍されていますが、今回のセントラル愛知交響楽団定期でも、まずは夫妻の共演でモーツァルトのピアノ協奏曲をお聴きいただけます。

ごく幼い頃から〈神童〉とうたわれたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、なんとといっても鍵盤楽器を得意としたひとでした。今でいうピアノ、当時はその前身にあたる(もっと音の小さい)クラヴィアで自作の協奏曲を弾いては、喝采を浴びておりました。

当時の協奏曲は、クラヴィア奏者が弾きながらオーケストラの指揮をとっていました。現代の作品のように大編成ではありませんから、指揮者なしでも奏者同士が意思疎通できたのです。

それで現在でも、モーツァルトのピアノ協奏曲は〈ソリストの弾き振り〉というかたちで演奏されることがあるわ

けですが、次回定期では安永徹さんがコンサートマスターとして、オーケストラをリードいたします。

次回定期では、モーツァルトが(そう長くない)生涯にわたって書き続けたピアノ協奏曲から、彼がお弟子さんのために書いた第17番ト長調 K.453(1784年)をお聴きいただけます。オーケストラの響きも耳に豊かな名作で、陰翳豊かな緩徐楽章や、彩りも素敵なフィナーレが変奏曲のスタイルになっているのも嬉しい作品です。

ピアノの市野あゆみさんも長らくベルリンで活躍されたほか、安永徹さんとのデュオCDも多数。次回定期で弾いていただくモーツァルトのピアノ協奏曲第17番は、やはり安永さんをコンサートマスターに迎えたオーケストラ・アンサンブル金沢との演奏がCD化されていて[ワーナー/WPCS-11725(2004年)]、得意の1曲。この夫妻デュオがオーケストラとも音楽の呼吸を深くあわせる、モーツァルトならではの至福のひとつときを、ぜひ会場で。

◆素敵な愛の贈りもの —— エルガー〈弦楽セレナーデ〉

ピアノ協奏曲に続いては、指揮者なしのアンサンブルならではの音楽がお楽しみいただける作品を。イギリスの作曲家、エドワード・エルガー(1857~1934)の〈弦楽セレナーデ ホ短調 Op.20(1892年)〉です。

エルガーといえば、行進曲《威風堂々》など、ほとんどイギリス第2国歌のような人気になっているほか、初期の小品《愛の挨拶》も有名です。こちらは、ヴァイオリンのお弟子さんであった8歳年上の女性キャロライン・アリスと熱烈な恋におちたエルガーが、彼女に婚約祝いに贈ったプレゼントでした。

そして、次回お聴きいただく〈弦楽セレナーデ〉は、結婚3周年のお祝いに書かれた作品です。親族の反対を押し切って結婚、まだ作曲家として芽の出ないエルガーを信じてくれる愛妻との幸せな絆……作品に創作の背景を反映させて聴く必要はないのですけれど、この美しく流麗な名作(特に、優しく深い愛をこめたような緩徐楽章!)には、聴き手まで幸せにしてくれる何かが満ちています。どこか牧歌的な、しかし細部までとても緻密に考えて書かれた傑作で……全曲の末尾は、ワーグナーの楽劇《ジークフリート》を暗示しているという説もありますが(ワーグナーはこの楽劇を書いている頃、愛妻コジマへの贈り物として《ジークフリート牧歌》という名作を書いています)、はてさて。

◆哀しみと厳肅な美が融け溢れる —— モーツァルトの交響曲第40番

エルガーは楽器店の息子に生まれたおかげで、幼い頃からヴァイオリンを巧みに弾きこなしたそうですが、作曲を正式に学んだことはありません。それでも英国最高の作曲家にのぼりつめて〈サー〉の称号まで受けるのですから凄い話ですが、作曲を独学していた若い頃、ある音楽祭に奏者として参加した折、モーツァルトの交響曲第40番を弾いて「このように作曲するにはもっと勉強しなければ!」と発奮、この曲を模して曲を書いてみると、ますます修行に念を入れたといひます。

次回定期の後半では、作曲家エルガーの原点のひとつともなった、モーツァルトの交響曲 第40番 ト短調 K.550(1788年)をお聴きいただけます。

モーツァルト32歳の1788年、夏のあいだに交響曲第39番・第40番・第41番《ジュピター》と3曲もの交響曲を一気に(1)書き上げたというのも猛烈な天才ぶりですが、なぜ3曲まとめて一気に書いたのか……という謎は、西川尚生『作曲家◎人と作品 モーツァルト』[音楽之友社、2005年]に詳しいのでぜひ。

モーツァルト時代の交響曲には珍しいト短調(当時の聴き手には、なにか宿命的な響きを感じさせた調性でしょう)で書かれた第40番、哀しみと厳肅な美とが融け合って溢れだすその曲調は、クラシック愛好家以外にも広く知られるほどのインパクトをもっています。そして、それ以上に凄いのが曲の書法。詳しくは当日の楽曲解説にお譲りするとして、後世の作曲家たちにも大きな影響を与えたこの傑作……指揮者なしのアンサンブルで「こそ」表現できるものを、安永徹さんとセントラル愛知交響楽団の共演で深く掘り下げてゆきます。次回も、このホールで一緒に!

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

